

ドジョウ

Misgurnus anguillicaudatus

ドジョウ科



ドジョウ

名前の由来

「土生」の意とか、中国での呼び名「泥鱸・泥鰍」の字音に由来するとか、「泥津魚」の意とか、諸説があるが定説はない。別名：ホンドジョウ（北海道）はフクドジョウと区別しての言い方。漢字名：「鱸」または「泥鱸」

特定種

該当なし

形態的特徴

全長オス11cm、メス12cm。細長く筒型で、体全体が褐色を帯び、腹面は淡い色になる。尾ビレと背ビレに褐色の小さな斑が散在する。

口に10本のヒゲ、目の下に小さなトゲがある。オス成魚は、胸ビレが伸び、その第2鰭条（きじょう：エラのスジ）基部上片が後方へ厚くなって「骨質板（盤）」を形成する。これは産卵時に役立つ。



ドジョウ。尾ビレは円く、口ヒゲは5対10本

類似種と見分け方

フクドジョウ、エゾホトケ。
 体側に黒いラインがあるドジョウは、エゾホトケのみ。但し、メスには黒いラインがない。
 フクドジョウは尾ビレがバチ型（三角）なのに対して、ドジョウとエゾホトケはシャモジ型（まるい）。
 ドジョウはエゾホトケより細長く、尾ビレの基部に黒斑がない。
 口ヒゲの数は、ドジョウが10本（5対）、エゾホトケが8本（4対）、フクドジョウが6本（3対）。



類似種のフクドジョウ。尾ビレがバチ形、口ヒゲは3対6本



類似種のエゾホトケドジョウ。尾ビレは円く、口ヒゲは4対8本、オスには黒いライン

生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
産卵期				■								
孵化期				■								
幼生期 (アンモシーテス)					■							
成魚期					■							
						■		■				
							産卵		飼育下で数年生きる			

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・樹林）
鳥類
ワシ・タカ

一 生

産卵期は4～8月（西日本では6～7月）。すぐふ化し、1年で成熟する（1年成熟は早いほうだ、という説もある）。泥底にもぐって冬眠するという。

飼育下では数年生きるが、自然状態ではもっと短いだらうといわれる。

生息環境・分布

沼や湿地、小さな川、水田や用水路。

分布：朝鮮半島、中国、ベトナムなどに分布。

国内では全域に分布。北海道にもほぼ全域に分布するが、自然分布かどうかは不明。

十勝の河川に広く分布し、下流域の畑脇の明渠や堤防脇の堤内排水路にも生息する。流れの緩やかな場所に生息する。

食 性

動植物性。後期仔魚期には底生藻類や半底生浮游動物、稚魚期は甲殻類やイトミミズ、大きくなると動物以外にケイ藻や植物の茎・根・種子などを採る。成魚になると動物食

が減る。

繁殖生態

産卵期は4～8月（西日本では6～7月）。産卵場所は水田や小溝、河川敷の水たまりなど、浅い泥上。（水生植物と関係があるともいう）

産卵期、オスは背ビレ前方と背ビレ基底付近に1対ずつのこぶ状突起を持つ。産卵場所に遡上後、数日して、夜（特に雨上がりの早朝とも）産卵する。1尾のメスに数尾のオスが口で吸い付き、その中のオス1尾がメスの腹に巻き付

いて（背ビレ付近のこぶ状突起と胸ビレ基部の骨質板を利用する）放卵放精する。

体長10cmで卵径1mm程の卵を2,800個持つという。卵は泥上にばらまかれる（水田の場合）。

1産卵期に何度か完熟卵を持ち産卵する。水温20℃の時、約3日でふ化するという。

他生物との関わり

ゲンゴロウ、ヤゴ、タイコウチなどの水生昆虫に卵を食べられる。ヤゴやタイコウチなどはドジョウの稚魚を食べることもある。

産卵床は水生植物との関係が深いとも言われる。

興味深い話

■重要な食用魚で、蒲焼き、煮つけ、柳川などにしておいしい。

■釣餌としても利用される。

■生息水域の溶存酸素量が減少すると、水面へ頭を出して空気を飲み込み、「腸呼吸」をする。このため酸素欠乏には強いが、逆に空気呼吸が阻害されると、溶存酸素量が十分でも死亡するという。

■産卵したメスの肛門の両側には、オスが巻き付いた時の傷跡が残る。

■昭和30年代までは、水田内や水田からの排水、小河川などに多数生息していたが、昭和40年代に入り水田除草剤が使用されるようになると一気に減少した。また、排水路のコンクリート化などによって生息場所が少なくなったことなども影響し、「貴重種」としてもいいほど減少している。（妹尾優二）

■十勝地方のアイヌ語では、ドジョウ一般に「チチラカン」と呼ばれる。

配慮事項

水田や河川敷の水たまりは産卵場として貴重であり、川との行き来ができる必要がある。泥底にもぐって冬眠するので、泥のたまる緩やかな流れの場所が必要である。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(葦原・森林)
鳥類
ワシ・タカ

参考文献

「北海道の淡水魚」 稗田一俊、北海道新聞社 1984

「山溪カラー名鑑 日本の淡水魚」 川那部浩哉・水野信彦 編・監修、山と溪谷社 1989

「検索入門 川と湖の魚①」 川那部浩哉・水野信彦、保育社 1989

「川の生物図典」 奥田重俊・柴田敏隆・島谷幸広・水野信彦・矢島稔・山岸哲 監修、(財)リバーフロント整備センター編集、山

海堂、1996

「図説 魚と貝の大辞典」 望月賢二 監修、魚類文化研究会 編、柏書房 1997

「川づくりのための魚類ガイド」 北海道河川環境研究会、(財)北海道建設技術センター、2001

★ 妹尾優二：(株)エコテック、流域生態研究所